

モニタリングサイト1000里地調査
鳥類調査（概要版）

（財）日本自然保護協会

NACS-J
THE NATURE CONSERVATION SOCIETY
OF JAPAN

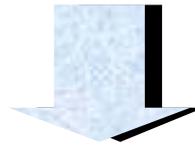

モニタリングサイト1000
Since 2003



なぜ鳥を調査するの？

□ 鳥の特徴

- ・一生で広い範囲を移動(数km~万km)
- ・森/草原/湿地など種ごとに住む環境が異なる
- ・生態系において様々な役割を担っている
(果実の種子や花粉を運ぶ植物の分散・高次消費者として食物連鎖などに大きな影響力を持っている)



- 地域の生態系の様子がわかる！
- 様々なスケール(地域・全国・地球規模・・・etc)での環境変化が把握できる！



調査概要

□ 目的

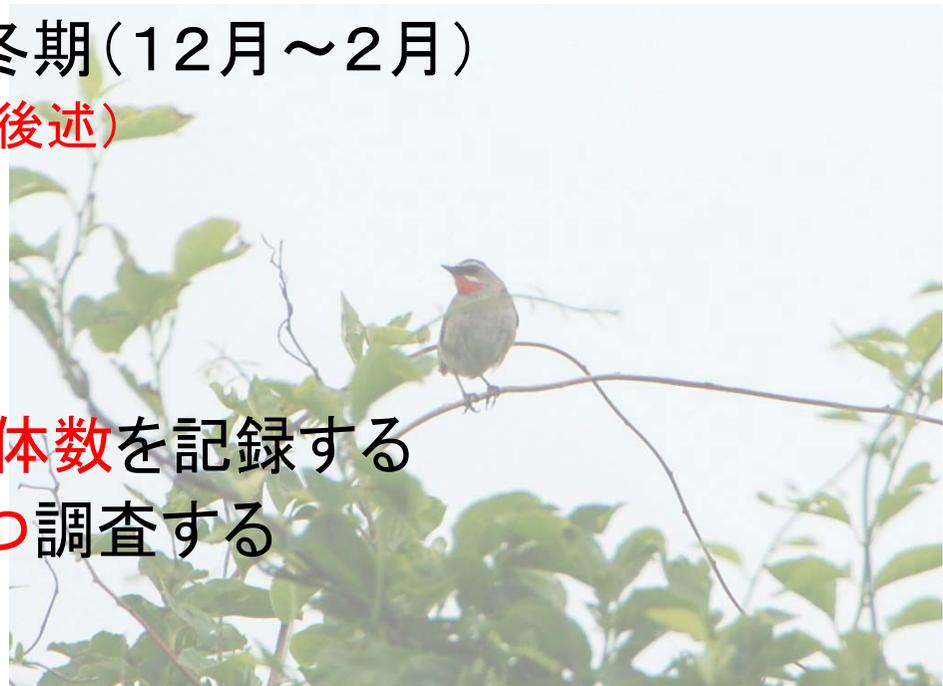
鳥を調査することで**広い範囲での景観や植生の変化**を把握する

□ 時期

繁殖期(4月～7月) 越冬期(12月～2月)
※地域ごとに差がある(詳細は後述)

□ 方法

- ・ **調査ルート**を設定する
- ・ ルート上の**鳥の種名**や**個体数**を記録する
- ・ 繁殖期と越冬期に**6回ずつ**調査する



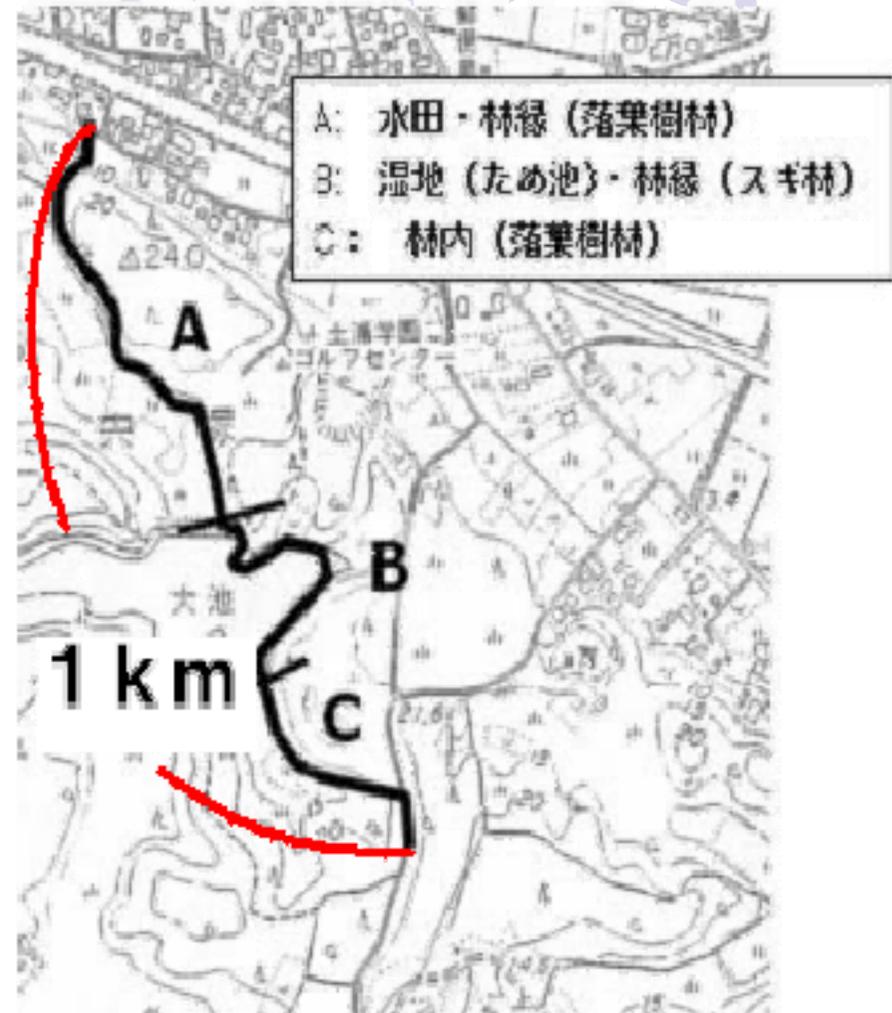


調査ルートを設定しよう！

- **1km**のルートを設定
(なるべく森林・水田・畑など、その里地の主要な景観が含まれるようにする)
- A・B・C・・・というように
景観ごとの区間に区切る

◆ 景観タイプの例 ◆

- ・ 森林 ・ 水田 (休耕田を含む)
- ・ 草地 (畑、耕作放棄地、牧草地、etc.)
- ・ 湿地 (ヨシ原、池沼、ため池を含む)
- ・ 市街地 など



※ 観察道や林道など調査しやすい
コース設定が良い



調査の時期と頻度

- 渡り鳥の移動が少ない**繁殖期**と**越冬期**にそれぞれ6回ずつ行う（雨/雪/風が強いなど悪天候の日は避ける）

	繁殖期	越冬期
調査時間	日の出～午前8時	午前中
調査期間	5月中旬～6月下旬 ※沖縄は4～5月 北海道は6月上旬～7月上旬	12月中旬～2月中旬

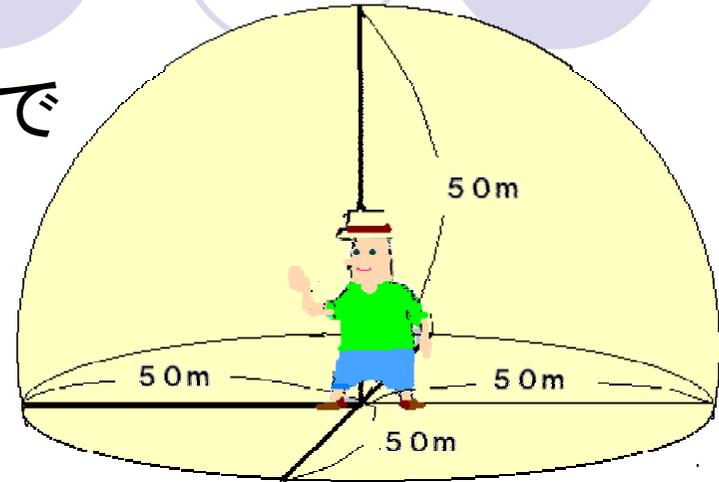
【6回調査の方法】 以下のいずれかで行う

- **一日に3回の場合**（ルートを一往復半）⇒ 2週間の間隔を空けて計2日実施
（3回×2日）
- **一日に2回の場合**（ルートを一往復）⇒ 10日～2週間の間隔を空けて計3日実施
（2回×3日）

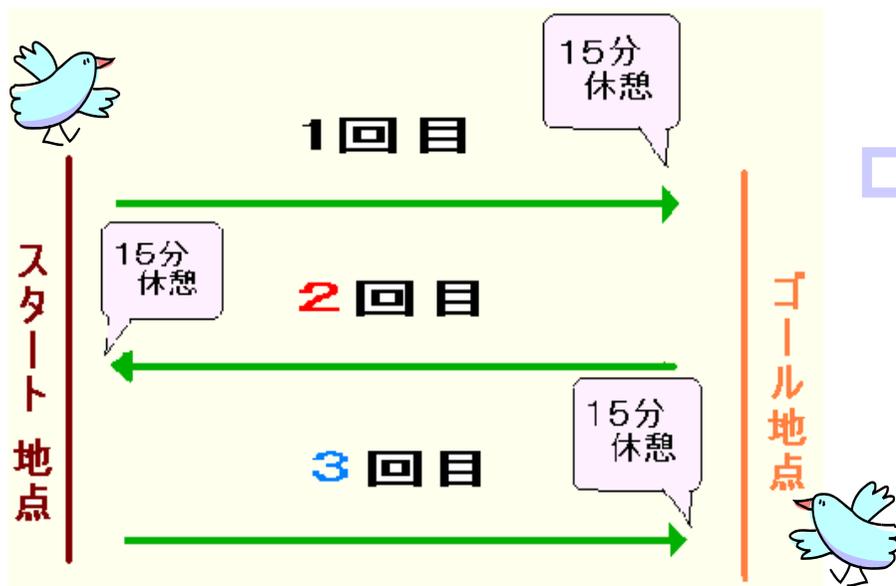


いざ調査へ！

- ルート上を**一定の速度**(約2km/h)で歩く
- **自分を中心とした半球内**で確認された鳥の種名・個体数を記録



□ …記録する範囲

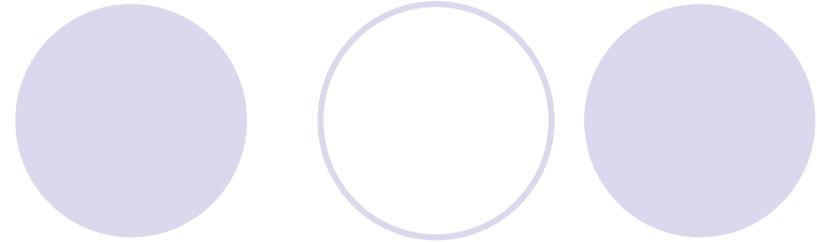


- ルートの終点にたどり着いたらその回は終了して、**15分ほど時間をおいてから折り返す**

※記録用紙は1回の調査ごとに新しいものにする



記入のしかた



モニタリングサイト1000里地 鳥類調査 調査記録用紙							
調査サイト:	001	記録用紙	枚目/計 3 枚				
調査サイト:	〇〇の里山	調査主担当者:	田中花子				
その他参加者:	鈴木・上田	天候	晴れ				
調査日時:	2006年 5月16日(5 : 50 ~ 6 : 24)		繁殖期・越冬期	4 回目の調査			
全体の備考	コースタにオオタカを確認、ガビチョウを初確認						
区間の備考	c:先月〇〇の会と地主さんとで林内の下草刈りをした						
区間名 (時刻)	種名	数	観察事項 [※] (該当するもの○にしてください)				備考
			同定ポイント	齢	繁殖行動	範囲外・時間外	
5 : 50	ウグイス	1	v ○ c	成鳥 幼鳥	親 巣材 他	範囲外・時間外	
:	カワラヒワ	1	v ○ s c	成鳥 幼鳥	親 巣材 他	範囲外・時間外	

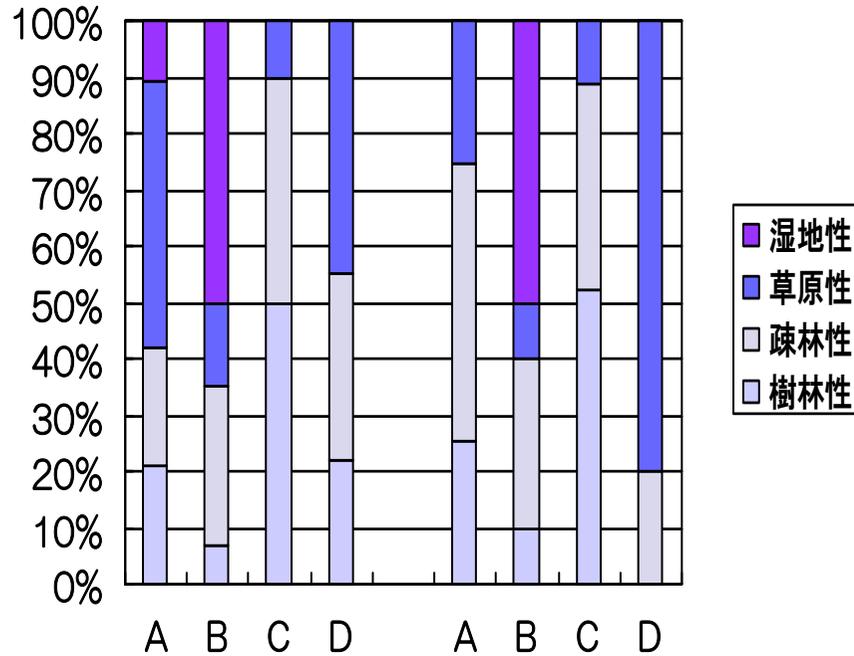
サイト名、担当者名の他に、

- ① 区間名
- ② 種名 忘れずに!
- ③ 区間ごとの調査の
開始・終了時刻
- ④ 個体数
- ⑤ 同定ポイント
(視認・さえずり・地鳴き)
- ⑥ 齢、繁殖行動
(わかれば)
- ⑦ 範囲外・時間外
- ⑧ 備考 などを記入



調査からわかること

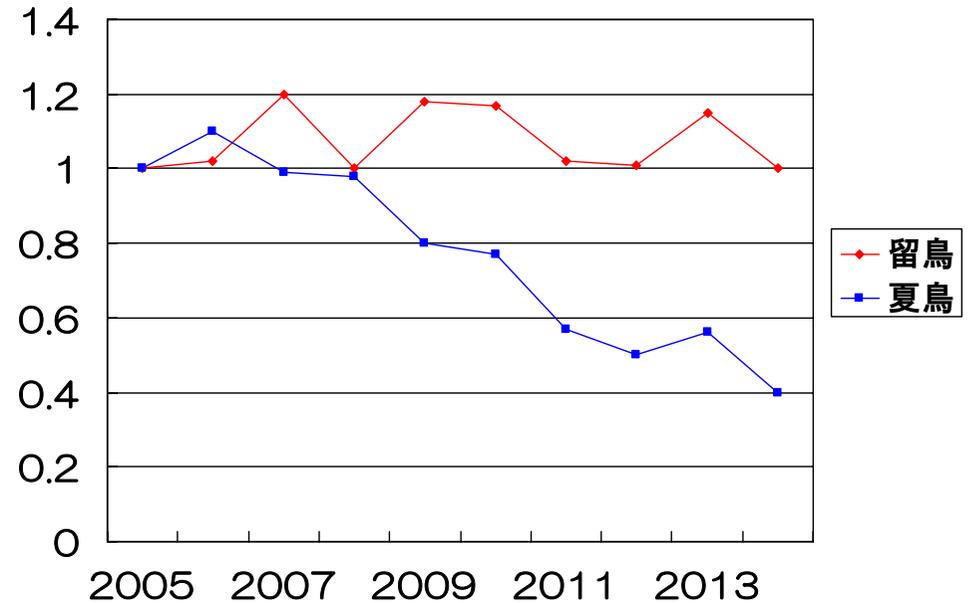
10年後の区間ごとの鳥類の合計種数に占める
生息地タイプ別の種数の変化(繁殖期)



この図から区間ごとの環境の違いや経年的な環境の変化が把握できる。10年間で区間Aでは湿地や草草が減少し、区間Dでは森林が草地に置き換わったのかもしれない。

10年間の繁殖期調査における留鳥・夏鳥の平均個体数の変化

(縦軸は全サイトの合計個体数について、初年度を1としたときの比率)



留鳥には目立った変化はないが夏鳥は減少傾向にある。夏鳥が越冬する南の国々での環境変化が生じているのかもしれない。